

天空の星へ願いを込めて

3年生の教室前に、色とりどりの短冊を吊した笹が飾られました。一枚一枚の短冊には、3年生ならではの願い事もあれば、思いやりに満ちた願い事もあります。ユニークな願い事、中には中学生という思春期を感じさせる願い事もあります。

7月7日は七夕。1年に1回だけ会うことを許された織姫（織女星）と彦星（牽牛星）。この梅雨空では、天の川や輝く星も見られないのではないかと気をもむ毎日です。ただ、新暦の7月7日は梅雨真っ只中であるため、旧暦の七夕である8月であれば、月遅れではあるけれども、天候がこの時期より安定しており、天の川や織女星と牽牛星も見られる確率が高いのではないかと思います。この二つの星は、理科の学習を思い出すことで、容易に見つけれられます。「夏の大三角形」と呼ばれている、「ベガ」「アルタイル」そしてもう一つ、夏を象徴する「デネブ」。どの星も明るく輝いているので見つけやすいでしょう。

さて、機織りの技が上手になるように、ひいては様々な手習い事が上達するように願い事を書いた短冊には、どのような意味があるのでしょうか。

まず五色とは、「青、赤、黄、白、黒」で、黒の代わりに紫を用いることが多くなっています。青＝木・赤＝火・黄＝土・白＝金・黒＝水を表し、木は火を呼び起こし、火は土を生み、土から金が掘り出され、金には水滴が付き、やがて水滴は新たな木を生長させるということで、どれも自然界で無くてはならないものです。

また、笹竹に短冊を吊して願い事をするようになったのは、江戸時代と言われています。笹は、成長が早く、生命力の象徴とされました。そして、手習い事をする人や、寺子屋で学ぶ子どもが増えたことから、星に上達を願うようになったのもこの頃です。本来はサトイモの葉に溜まった夜露を集めて墨をすり、その墨で文字を綴って手習い事の上達を願ったと言われています。奈良時代に中国から伝えられたとされている七夕の行事は、やがて日本の7月を象徴する行事へと形を変えながら取り入れられるようになりました。

各クラスに飾られている願い事を改めて見てみると、その時代の様子を垣間見ることができる内容も多いことに気づきました。



♪～ささの葉さらさら のきばにゆれる
お星さまきらきら きんぎんすなご

ごしきのたんざく わたしがかいた
おほしさまきらきら そらからみてる ♪～

紙風船や人形、網飾りなど、短冊の他にも様々な飾り付けがされます。どの飾りにも、その時代に生きた人々が、世の中の平穏を願う強い思いが込められてきました。

生徒達の願いが、「天空の星へと届きますように」と思いながら、校内を歩いている今日この頃です。